*No-No Boy*再考
―ヤマダ一家と戦後の日系アメリカ人のアイデンティティ表象―

遠　藤　　緑

Midori ENDO：Reconsidering *No-No Boy*
―The Yamadas and the Representation of Japanese―American Identities after the War

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要　第80号　抜刷

2020年 1月

*No-No Boy*再考
―ヤマダ一家と戦後の日系アメリカ人のアイデンティティ表象―

遠　藤　　緑[1]

Midori Endo：Reconsidering *No-No Boy*
―The Yamadas and the Representation of Japanese―American Identities after the War

日系アメリカ人二世の作家ジョン・オカダは第二次大戦直後のワシントン州シアトルを舞台に日系アメリカ人二世の徴兵拒否者を主人公にして小説 *No-No Boy* を書いた．本論考は，主人公イチローが戦後のアメリカで日系人として自分のアイデンティティを模索する物語として論じられることの多いこの作品を，イチローの家族から再考する．

キーワード：*No-No Boy*　日系アメリカ文学　アイデンティティ

はじめに

アメリカ南部の奴隷法や，中国人排斥法，プエルトリコやフィリピンにおける植民支配の体験が，それぞれの文化，社会に深い影響を与えたように，日系アメリカ人の収容体験も，アメリカの日系社会に影響を与えた[1)]．日本の真珠湾攻撃により始まった戦争は，マイノリティとしてアメリカ社会に受け入れられていなかった日系人に大きなショックを与え，暮らしは一変することとなった．二世が英語で書いた日系アメリカ文学は，「収容所体験が基盤となって開花した」[2)]とも言われるように，第二次大戦中の日系人強制収容は日系アメリカ人二世作家による作品において重要なテーマとなっている．日系二世のモニカ・ソネ（Monica Sone，1919-2011）は，戦争・収容を体験しており，1950 年代に *Nisei Daughter*（1953）を書いた．その中で，強制収容に向けて荷造りをしている場面や収容所での家族の生活を書いているが，ソネの作品は少女の目を通した語りでユーモラスなところもある．一方で同じく日系二世の作家であるジョン・オカダ（John Okada，1923-1971）は，第二次大戦直後のワシントン州シアトルを舞台に日系アメリカ人二世の徴兵拒否者を主人公にした *No-No Boy*（1957）を書いた．タイトルであるノーノー・ボーイとは，戦時中おこなわれたアメリカ国家への忠誠に対する質問 33 項目のうち，次の二つにノーと答えた者たちである．第 27 項は，アメリカ合衆国の軍隊で，命令されたどんな場所でも戦闘義務を果たすか，を尋ね，第 28 項は，アメリカ合衆国に無条件の忠誠を誓い，合衆国を外国や国内の敵対勢力のどんな攻撃からも忠実に守り，日本国天皇やどんな外国政府，権力，組織に対しても服従しないと誓えるか[3)]というものであった．徴兵年齢（17 歳）に達していた者はアメリカ市民であってもこれらの質問に答えなければならず，ノーノー・ボーイたちはトゥールレイク収容所に収容され，徴兵拒否をしたものも連邦刑務所へ入れられた．オカダ自身はノーノー・ボーイではなかった．シアトルで生まれ育ち，太平洋戦争が始まるとオカダの一家はアイダホ州ミニドカの収容所へ送られたが，その後彼はアメリカ軍に志願，従軍し，戦後は占領軍の一員として日本に駐留したこともあった[4)]．

1　鳥取短期大学国際文化交流学科

一般的に *No-No Boy* は，主人公イチロー・ヤマダ（Ichiro Yamada）が戦後のアメリカで日系人として，自分のアイデンティティを模索する物語として読まれている．物語は，イチローが刑務所で二年のときを過ごし，シアトルへ戻ってくるところから始まっており，戦時中に徴兵を拒否したことで，日本人であること，すなわちアメリカに背を向けたことを証明したと日系人であるイチローは苦悩する．ノーノー・ボーイ，徴兵拒否，日系人の収容といった，1950 年代になってもまだ語りにくかったタブーだけでなく，日本の敗戦を信じられない一世の母親や同じ二世の弟との確執，従軍した日系人・しなかった日系人の共に不幸な現状など，そこには日本とアメリカ，一世と二世の間で悩み，翻弄され，苦しむ人々が多く描かれている．安原義博はイチローを「アメリカ社会の主流とマイノリティの境界にいるものと位置づけ」[5]たうえで論じた．イチローが自らのアイデンティティを求めてさまよう点にも言及しているが，「イチローの彷徨がアイデンティティを探し当てたとは言い難い」[6]と主張する．一方，この作品をイチローの失われた愛国心を取り戻す物語として読む[7]研究者もいる．Elaine H. Kim は，“no Japanese American literary work depicts the fragmenting effects of internment on the family and community more vividly or poignantly than John Okada's *No-No Boy*”[8]と評している．しかし，*No-No Boy* は今まで論じられてきたように，境界に生きる個人の葛藤やイチローのアイデンティティの模索の物語にすぎないのか．さらに，この小説はキムの言うように，日系人家族やコミュニティの崩壊を描いただけにすぎないのか．本論考は，*No-No Boy* に描かれるアイデンティティのあり方を再考する試みである．そのために，まずイチローを取り巻く家族から考察する．

1．イチローの母と日本

イチローの母は，長くアメリカに暮らしているのにアメリカを全く受け入れず否定し続け，狂信的なまでに日本を愛しており，日本が戦争に負けたことを信じることができず，息子たちにも日本人であることを強要する人物として書かれている．母の頑固さがイチローの個性を壊し，アメリカに背を向けさせるほどだったことは，イチローが母に対して回想している言葉からわかる．

> Ma is the rock that's always hammering, pounding, pounding, pounding in her unobtrusive, determined, fanatical way until there's nothing left to call one's self.[9]

母の極端な頑固さと執着は，自分と呼べるものを何も残さない（there's nothing left to call one's self）ほどまでに壊してしまう石（rock）なのだ．母はその頑固さを自分の強さであり，自分の強さは日本の強さであると自負している（they envy my strength, which is truly the strength of Japan）[10]．イチローの母の日本に対する極端さは，母自身が日本を体現する人物として描かれていること，そして「母＝日本」を示しているのではないだろうか．

例えば，母はイチローに，アメリカの軍隊に入ることについて，自分の思いを次のように話す．

> I will be dead when you go into the army of the Americans. I will be dead when you decide to go into the army of the Americans. I will be dead when you begin to cease to be Japanese and entertain those ideas which will lead you to your decision which will make you go into the army of the Americans. I will be dead long before the bullet strikes you. But you will not go, for you are my son.[11]

自分の子どもが「アメリカ軍に入るならば自分は死ぬ（I will be dead when you go into the army of the Americans）」という言葉は，戦場に子どもを

送り出す親の立場としては，当然かもしれない．しかし，母の言葉はそれだけにとどまらず，イチローが日本人であることをやめることを選ぶ（begin to cease to be Japanese）ならば死ぬとまで言っている．戦中・戦後の日系人にとってアメリカ軍に入ることは，アメリカへの忠誠，すなわち敵国の日本人でないことを証明する方法であった．だから，イチローという自分の分身ともいえる息子が従軍により「アメリカ人になる」ことが日本である「自分の死」とイコールであったのだろう．しかも実際に戦場で銃弾に倒れるより前に死ぬ（I will be dead long before the bullet strikes you）というのは，母が日本を体現しており，「母＝日本」と同様であろう．イチローの母が“But you will not go, for you are my son.”と言うとき，まさかイチローが自分という日本を裏切り，アメリカを選ぶはずがないという確信がある．

だからこそ，イチローの弟のタローがアメリカ軍に入ると告げて家を出た時，そして日本からの物資の援助を求める手紙で，日本がアメリカの攻撃によって壊滅的な状況にあることを信じざるを得なくなった時，母の根本といえる日本は揺らぎ，失われかけたのだろう．タローが家を出た時の母の反応は，次のようなものであった．

> The mother uttered a single, muffled cry which was the forgotten spark in a dark and vicious canyon and, the spark having escaped, there was only darkness, but a darkness which was now darker still, and the meaning of her life became a little bit meaningless.[12)]

息子がアメリカ軍に入ることを，自らの死と言っていた母にとって，タローの行動は自らの一部を失うものであったことは確かである．人生の意味を少し失った（the meaning of her life became a little bit meaningless）程度ではなかっただろう．ひと言（a single, muffled cry）を発した後に，暗闇だけが残り，その闇は暗さを増していた（there was only darkness, but a darkness which was now darker still）という表現からは，母の根幹，信じていた日本である自分自身が真っ暗闇になってしまったという母の絶望がわかる．さらに追い打ちをかけたのが日本からの手紙であった．母はずっと，自分の信じる日本は戦争に負けることなどない，強い日本だと信じていた．だから，日本にいる親類が送ってくる助けを求める手紙は偽物だと決めつけ，読みもしなかった．一方で日本に帰るための船が迎えにくるという南米からの手紙を本物だとして，自らの支えとしていたことは手紙の扱いからもわかる．Carefully holding the letter and placing it back in the envelope, she returned it to her pocket[13)]のように，大切なものとして，箱やタンスにいれておくよりも，ポケットにしまい身近に置いていた．しかし，イチローの父が，キンちゃん（Kin-chan）という幼いころのニックネームと姉妹の秘密と共に敗戦と日本の現状，救済を求める手紙を読んだとき，初めて母は日本の現状を認めることとなり，強い日本と共にあった母の石のような強さは砕けることとなる．

結局，イチローの母は自殺をするが，死ぬことで自分が誰であったのかを証明したのだと考える．「アメリカ人になること」と「死」を結び付けていた母は，アメリカに同化せず「日本」のままであり続けるために，自ら死を選んだのではないか．タローがアメリカ軍に入ることを認めることは，自分の中の日本がアメリカに取って代わられることであったし，日本からの手紙に応えて物資を送るには，日本の敗戦と戦後の惨状，すなわち「強い日本」が虚構であったことを認めることであった．しかし，これらを認めることは，母にとっては「死」とイコールであったし，認める前に「自殺」を選ぶということで，母は自分や日本をアメリカ，弱さと同化させないようにしたと言えるのではないか．

2．イチローの弟とアメリカ

一方でイチローの弟タロー（Taro）は，頑ななまでにアメリカ人になろうとし，アメリカ人であることを証明しようとする．戦争は終わり，徴兵もされていないのに，大学を出てから軍に入るのでは遅い（That isn't soon enough for me）[14]といい，高校を卒業することなく，18歳になったからと軍へ入ることを決める．先にも述べたように，アメリカ軍に入るということは，アメリカへの忠誠やアメリカの一員であることを目に見える形で示す手段である．従軍できる年齢の誕生日のまさにその日に軍に入るということが，タローの「アメリカ人にならなければ」という焦りと，とにかく「アメリカ人になりたい」という願いを表している．

さらに，実の兄であるイチローを，他の日系アメリカ人の若者と一緒にJapだと馬鹿にし，嘲り，暴力をふるう．日系アメリカ人という点では，イチローもタローも，タローと共にイチローを襲った若者も同じである．少なくとも，見た目という点ではみな同じにみられているはずである．だが，イチローを“That's Jap”[15]から始まり，itや“Just like a dog”“Dogs don't wear pants”[16]と蔑み痛めつけることで，自分たちはJapを犬同様に見ていること，自分たちはそのようなJapではないことを示そうとしている．バーの中にいたイチローを表にわざわざ出させ，人目に付く場所で襲っているところからも，タローや仲間の若い日系アメリカ人が他者に示したい「アメリカ人としての自己」が窺える．

タローは，軍に入るとイチローに告げる場面，自分の誕生日に軍に入ると家を出ていく場面，そしてバーにいたイチローを痛めつける場面にしか出てこない．このように，とにかくアメリカ人としての自己を証明するのがタローである．タローに関する最後の記述は母の葬式だが，イチローがタローに向けて母が死んだことを知らせる電報を打つが，タローは葬式に現れなかった．軍の基地にいて，イチローの電報にも応じず，母の葬式にも帰ってこないタローは，日本や日系人というものを完全に断ち切る形で，アメリカ人であろうとしていると言えよう．

3．「何もない」イチローの父

イチローの母やタローと比べ，イチローの父は強い自己や主張を持っていない．“Pa's okay, but he's a nobody.”[17]や“You're nothing”[18]のように「誰でもない（nobody）」「何もない（nothing）」という言葉を使いイチローが言うように，特にどうありたいというものが「何もない」ということが父の特徴である．自らを表す重要な名前すら持たない人物である．イチローやタロー，そして名前のない母でさえ「キンちゃん」というニックネームが明らかになっているのに，父の名前は小説内に一度も出てこず，名前という個人を特定する要素も「ない」ままに話は進んでいく．自分がアメリカにやってきたきっかけもあいまいで，イチローになぜアメリカに来ることになったのか（“What made you and Ma come to America?” “Did you have to come?”）[19]尋ねられたときも「みんなアメリカに来たんだ（Everyone was coming to America）」[20]と，everyoneという不特定多数を示す言葉を使い返事をしており，そこに個人の意思はみられない．

イチローの母のような強固な自己がない父は，母のいいなりになっている．母の言う通りに店番をし時間をかけて歩いてパンを買いに行くことも認めている．さらに，当時の日本では女性や母親がすることが当たり前だったような家事もヤマダ家では父がしている．お茶を入れ，食事をつくり，キャベツも漬ける．威厳を持った父親像からはほど遠いところにいるのがイチローの父である．タローが家を出てアメリカ軍に入るという一大事にも，タローのことを止めることはおろか，イチローの目には父がタローを恐れているように映るほどである．“he saw in the fearful eyes of the father the departure of the son who was not a son but a stranger and,

perhaps more rightly, an enemy leaving to join his friend."[21]のように，タローは息子ではなく，見知らぬ人へ，そして敵のような存在になってしまい，結局何も言わず出ていくがままに任せるのだ．

さらに父は，日本が戦争に負けたことを知っていながら，"I cannot do anything for her"[22]と言い，母に真実をわからせることができない．ようやく母に日本からの手紙を読んで聞かせ，現実を伝えようとしたかと思えば，母の態度の変化やご飯を食べなくなったことに動揺し，"Your own sister would never write such a letter. You have said so yourself. It is not to be believed."[23]というように，手紙は偽物だと言ってなだめようとする．

このように父は，家事や出来事など様々なことに，自己主張や自分の考えを持つことなく，どちらかと言えば，母やタロー，イチローの起こす出来事に巻き込まれているだけである．そういった巻き込まれた出来事から抜け出すために酒におぼれているのだ．

４．間で揺れ動くイチロー

このように，母（日本），弟（アメリカ），父（無）の関係は三角関係のようであり，その真ん中にいるのがイチローであろう．イチローは日本とアメリカの間で揺れ動く人物である．イチローは自らについて，half という言葉を使い，次のように語っている．

> I was that boy in the peach and you were the old woman and we were Japanese with Japanese feelings and Japanese pride and Japanese thought because it was all right then to be Japanese and feel and think all the things that Japanese do even if we lived in America. Then there came a time when I was only half Japanese because one is not born in America and raised in America and taught in America and one does not speak and swear and drink and smoke and play and fight and see and hear in America among Americans in American streets and houses without becoming American and loving it. But I did not love enough, for you were still half my mother and I was thereby still half Japanese and when the war came and they told me to fight for America, I was not strong enough to fight you and I was not strong enough to fight the bitterness which made the half of me which was you bigger than the half of me which was America and really the whole of me that I could not see or feel.[24]

生まれた時は日本人だったが，アメリカで育つうちに「半分」日本人で「半分」アメリカ人になるという感覚は，日本から来た両親を持つ日系アメリカ人には二つの文化に触れているという点でも当たり前といえるかもしれない．しかし，単純に日本とアメリカに分けられずに，あるいは混ぜられずに複雑化した理由は戦争にあるだろう．戦争により，日本人であることはアメリカを裏切ること，敵国の人間であることとなった．さらに，いくらアメリカ人だと自分では思っていても，見た目からはアメリカ人とは思ってもらえない．イチローに関しても，"Jap!" "Go back to Tokyo, boy."[25]のように，アメリカ人からはノーノー・ボーイであるからとか以前に，見た目で Jap と蔑まれる．しかし，先に述べたように，「半分」はアメリカ人だったのだ．法的にはアメリカ人であることをイチローももちろん分かっている．そのうえで"But it is not enough to be American only in the eyes of the law and it is not enough to be only half an American and know that it is an empty half."[26]と言い，法的にアメリカ人であるだけでは不十分で，しかもその半分が空虚ではいけないという．

イチローが日本とアメリカの間で揺れ動く場所にいるのは，母の存在と忠誠の質問も大きく影響を与

えている．前述のように，イチローの母は日本を象徴する人物でとても強い．それゆえ，母の息子であり，タローのように母（日本）を切り捨てることのできなかったイチローは「半分」日本人なのだ（for you were still half my mother and I was thereby still half Japanese）．イチローの母は，もちろん息子には「半分」ではなく完全な日本人でいてほしかった．だが，アメリカで育ち，日本とアメリカの間で揺れる立場のイチローは，忠誠を誓わなかったことを後悔し，母（日本）との関係を次のように述べている．

> Ma is the rock that's always hammering, pounding, pounding, pounding in her unobtrusive, determined, fanatical way until there's nothing left to call one's self. She's cursed me with her meanness and the hatred that you cannot see but which is always hating. It was she who opened my mouth and made my lips move to sound the words which got me two years in prison and an emptiness that is more empty and frightening than the caverns of hell. She's killed me with her meanness and hatred and I hope she's happy because I'll never know the meaning of it again.[27)]

従軍しなかったことで刑務所に入ることになり，地獄のような空虚さを味わうことになったのは母のせいであり（It was she who opened my mouth and made my lips move to sound the words which got me two years in prison and an emptiness that is more empty and frightening than the caverns of hell），母の希望を汲んでノーと言ったことは母の呪いとまで思っている．イチローが体験した空虚さ（emptiness）は，父親の nothing とはかなり質の異なるものであろうが，それでも「ない」という点に関しては通ずるものがあるのではないか．

5．考察

このように，ヤマダ一家の 4 人はそれぞれが全く異なる存在である．日本（母），アメリカ（タロー），無（父），その間を行き来するもの（イチロー）という多様性は，それぞれが相いれないことや，母の自殺やタローの家出・従軍というストーリーもあり，家族の崩壊という側面も持っているように見える．しかし，それだけが描かれているわけではない．極端に違う異質なものが，家族というくくりの中にあるということは考慮すべきだと考える．個人でなく，家族という単位で目を向け，ヤマダ一家で一つの集合体だと考えると，そこに見えるのは相反するものを同時に抱えた，戦後の日系人の集合的なメンタリティやアイデンティティではないだろうか．

戦争により，一晩にして敵とみなされてしまう体験や，忠誠の質問，強制収容が日系人に与えたトラウマは，まさにヤマダ一家の相反する多様性，複雑さに通じる．Lisa Lowe は，敵という名のもと日本人であることを証明するか，疑問も抱かずアメリカの文化に同化し日本文化を否定するといったことは，自分たち独自の文化を捨て，主流の文化に同化しない限り権利はく奪の危機に直面しているマイノリティには起こり得る苦境であることを説明している．その上で，しかし日系アメリカ人の場合，収容所での身体的抑留と，二世の男性には従軍し日本と戦うことで愛国心の証明を求めるということが，強制的に実施されたことも指摘している[28)]．このように，忠誠の質問は，アメリカに忠誠を誓ったアメリカ人か，アメリカに忠誠を誓わず敵である日本人であるかのラインをきっちりと引き，二つを分断するだけでなく，様々な複雑さを日系人の中に残すこととなった．

例えば，日系二世の多くは，アメリカで生まれ育ち，日本には行ったこともなく，日本語もままならず，本人たちはアメリカ人でいるつもりだったのに，パールハーバーの事件で「日本人」とみなされ

るようになる．たとえ日本人・日系人であることをやめたいと思っても，見た目からは敵国の人間であることは明らかだ．さらに，アメリカ国籍を持つことができなかった一世に比べ，「アメリカ人」でもあった二世の思いは複雑であっただろう．戦争を通して「日本人」「敵国の人間」であることを自覚せざるを得ない一世との間に考えの違いや溝ができることも想像できる．こうした，いきなり敵にされてしまったトラウマや，罪悪感，傷といった，戦争により日系人が負うことになった集団的トラウマと，複雑で相反するものを抱えた日系人の集合的メンタリティをイチローの家族は体現しているのだと考える．

引用・参考文献

1）Lauter P, “Introduction”, *Ethnic American Literature: an Encyclopedia for students*. Nelson E, Ed. (Santa Barbara: Greenwood, 2015), pp. xvii-xxiv.

2）小林富久子「『沈黙』と『語ること』―日系女性作家における母―娘関係のテーマ」,『アメリカ研究』1993 巻 27 号（1993），pp. 151-169.

3）Abe F, “Introduction: Saying ‘No! No!’ to the Community Narrative”, *John Okada: the life and rediscovered work of the author of No-no boy*. Abe F, Robinson G, Cheung F, ed. (Seattle: University of Washington Press, 2018), pp. 5-6.

4）Abe F, “An Urgency to Write”, *John Okada: the life and rediscovered work of the author of No-no boy*. Abe F, Robinson G, Cheung F, ed. (Seattle: University of Washington Press, 2018), pp. 15-115.

5）安原義博「ジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』論―アメリカ社会の主流とマイノリティの境界」，山口和彦・中谷崇編『揺れ動く〈保守〉―現代アメリカ文学と社会』，春風社，2018，p. 129.

6）前掲 5).

7）佐藤清人「イチローの回復された愛国心 ―ジョン・オカダの『ノー・ノー・ボーイ』試論」,『山形大学紀要』（2002）第 15 巻第 1 号，pp. 129-139.

8）Kim E. *Asian American Literature, An Introduction to the Writings and Their Social Context* (Philadelphia: Temple University Press, 1982), p. 148.

9）Okada J. *No-No Boy* (Seattle and London: University of Washington Press, 2014), p. 13.

10）前掲 9)，p. 40.

11）前掲 10).

12）前掲 9)，p. 62.

13）前掲 9)，p. 15.

14）前掲 9)，p. 18.

15）前掲 9)，p. 72.

16）前掲 9)，p. 73.

17）前掲 9)，p. 13

18）前掲 9)，p. 105.

19）前掲 9)，p. 19.

20）前掲 19).

21）前掲 9)，p. 62.

22）前掲 9)，p. 35.

23）前掲 9)，p. 104.

24）前掲 9)，p. 16.

25）前掲 9)，p. 7.

26）前掲 24).

27）前掲 17).

28）Lowe L. “Canon, Institutionalization, Identity” *The Ethnic Canon*. David Palumbo-Liu Ed. (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1995), pp. 48-68.